

〈論文〉

室の八島への憧憬

— 旅の古代と観光の中世 —

津島 昭 宏

一、想像する室の八島

その場所がもつ独自の風景は言葉によって縁取られていく。現地を自身の眼で見えて確かめてみても、それと認識して記憶に留めていくにあたっては、どうしても言葉による定着が求められる。実際に訪れていまだ視野に収めたことがない場合にも、言葉という情報を

介してその風景に思いをはせることが可能だ。

いや、まっさらな状態で未知なる場所に行くわけとなどそうそう無い。北海道や沖縄に初めて訪れる際だって、ある程度、北海道はこれこれ、沖縄はこれこれ、といった像を抱いたうえで出向いていくことだろう。つまり、たいていはその土地に対する風景なりイメージなりを事前に知ったうえで、現地を訪れた時に

イメージとの重なりで安心したり、そのズレに感動したり落胆したりするということだ。旅すること、とりわけ観光というものはおおよそこのようなものである。

主に古代から中世にかけての旅、観光の問題を考えたいが、当時の旅のガイドブックたり得た情報とは何か。それはやはり歌枕であつたろう。その場所がもつ独自の風景を、歌のなかで繰り返し繰り返し鍛え上げながら縁取っていくものが歌枕である。逢坂といえ、地理的・自然的要因とは別に、男女が出会う恋愛の場と認識されたように、歌枕はひとつの場に固定的なイメージを付与していく。ここでは、そのイメージが重層的なものとして知られる下野国の歌枕、室の八島について取り上げたい。下野は東山道により至るが、白河の関の手前であり、更にその先が「みちのおく（陸奥）」だから相応の辺境と意識されたことだろう。^{（注1）}

人に、はじめて

いかでかは思ひありとは知らすべきむろの八島の
けぶりならでは

この歌を、右少弁為任のとりて、詠うだり
ければ

このごろはむろの八島も盗まれて思ひありともえ
こそ知らせね

（新日本古典文学大系『平安私家集』『実方集』九

〇・九一）^{（注2）}

和歌のなかに見える室の八島、その古い例として右に掲げるものが見える。前者の九〇番歌は中古三十六歌仙に数えられる平安中期の歌人藤原実方の作によるものであり、『金葉和歌集』（三奏本）三七八番歌、『詞花和歌集』一八八番歌等にも見えるものである。どうしたらわが心の内を知らせることができようか、いやできやしない、室の八島の煙ではないのだから。「思ひ」に「火」が掛けられ「けぶり」と縁語関係になるわけだが、こうした解釈からは、「室の八島」なるものがあるいはそのように呼ばれる場所が煙を発生させるもの、といった認識が前提だったことが分かる。一方で、実方とは従兄弟となる藤原為任の詠歌、九一番歌を見ると、その「むろの八島」も「このごろは」「盗まれて」、その「思ひ」を知らせることが出来ないのだという。ここはどのように解釈すれば良いのだろうか。「盗まれて」とは何かが無くなったことを表わそうから、結果、

煙を生じさせるものではなくったということで、「思ひ」を伝えられないといったところか。

ところで、「室の八島」の語義には別解もあり、大炊寮に「大八嶋竈神」があるため、それは竈を指すとする見方である。この解によれば二首は器物そのものをめぐるものだとする考え方も成り立とうし、また、「盗まれて」については、「むろの八島」を詠んだ歌が盗まれたとする理解かもしれない。^(注3)

しかし、一般に室の八島といえば、栃木市惣社町に鎮座する大神神社の境内一帯、あるいはそこに見られる八つの小島を有する池の古称とされる歌枕である。^(注4)ただし、実際にはそれを確かに示すものではなく、付近の国府あたりだとする資料のみ知られる。『古今和歌六帖』にも、「下野や室の八島に立煙思ひ有とも今こそは知れ」（和歌文学大系、第三帖、一九一〇）と見えている。そこが煙を生じさせるという理解については、その地に見える池から立ちのぼる水煙だとも、室の八島が竈を意味することからだとも、諸説あり判然としない。ただ、実方歌以降、室の八島を取り上げた歌の多くに「思ひ」や「煙」が詠み込まれてきており、

そうした認識が広く定着していたことは事実である。

それでも、室の八島の「煙」は早い段階から実景と結びつきにくくもあつたようで、為任の歌のなかの、「盗まれて」はそのことを指していたとも考えられよう。前述したように、「室の八島」が竈を指す、すなわち器物をめぐるやりとりの歌かもしれない。しかし、そうした理解を踏まえても、この語が歌枕として定着を見たことからは、「室の八島」に「煙」を伴わないとする実態を暗に示すものとは言えようか。

実景・実態のうかがい知れぬ「室の八島」、その発想をもつ類似の歌としては、

人をおもふ思ひをなに、たとへましむろのやしま
も名のみなりけり

（『重之女集全釈』風間書房、八一）

十住心の中に、覚心不生心のころを

法印守遍

跡もなき室のやしまの夕煙なびくとみしやまよひ
なるらん

（新編国歌大観『新拾遺和歌集』卷十七・釈教歌
・一五〇四）

といった例が挙げられる。前者、重之女の歌は、「人をおもふ思ひ」に「火」を詠み込む定型が踏まえられながらも、「名のみなりけり」と、名前ばかりであることから、わが思いを何物にも喻えられないのだとする。「名のみ」とは、それにふさわしい実を伴わないことを表そうか。後者、法印守遍の歌は、空海が説く「十住心」の一つ「覺心不生心」にあたるものを示したもので、その教義は実体をもたぬ「空」だとする。室の八島の夕煙がたなびいていると見えたのは心の迷いのなせるわざだとする歌だ。「跡もなき」が「室のやしま」「夕煙」いずれに掛かるとしても、室の八島の煙には実態がないのだとする理解があつたことを指し示す歌となる。

要するに、「室の八島」なるものが「煙」を生じさせて、それが歌に詠まれることは一般に定着してはいたものの、少なくとも実方歌ならびに為任歌が詠まれたころあたりには実態が不明なものとされていたことが分かる。

一方で、現在「室の八島」は「実在するもの」として目にすることが出来る。大神神社の境内にある池に

は八つの小島と呼ぶべきものが点在して、それぞれを渡れるよう橋が掛けられ、そこが「室の八島」と名付けられている。入口から渡ると八つの小島にはそれぞれ小祠があつて、筑波神社・太宰府天満宮・鹿島神宮・雷電神社・富士浅間神社・熊野神社・二荒山神社・香取神社と鎮座しており、名だたる神社を参拝できる仕組みとなつている。そんな広範囲に鎮座する各社をほんの数分で一巡りできるところ、それが現在の室の八島なのであつて、さながらミニチュアワールドの観を呈している。言つては悪いが、訪れてみると、「なんだ、こんなものか」といった感否めない。

室の八島は古代より歌枕として定着を見せつつ、その実態がつかみきれないままで来たなか、その歌枕を可視化するための仕掛けとして、後代に「室の八島」の名にふさわしいものをこの地に作り上げた、いわば捏造したというのがどうも実際のところであるようだ。^(ま)もちろん、それが良いの悪いのという話ではなく、伝承なり伝説なりを想像（あるいは創造）する事例はあらゆるところに見られ、そうした想像力を喚起すること自体が、伝承なり伝説なりに内在する本来的な性

質であり、魅力でもある。伝承・伝説由来の観光地はみなこれであり、芭蕉も『おくのほそ道』の道のりにおいて、室の八島を最初の「観光」地として訪れている。

室の八嶋に詣ス。同行曾良が曰、「此神ハ木の花さくや姫の神と申て、富士一鉢也。無戸室に入て焼たまふちかひの中に、火火出見のみことうまれ給ひしより、室の八嶋と申。又煙を讀習し侍るもこの謂也。將このしりと云魚ヲ禁ズ。縁記の旨、世に伝ふことも侍し」。

（『おくのほそ道』七七）

しかし、室の八島に寄せる芭蕉の関心は驚くほど淡泊だつといわざるを得ない。道中、最初に訪れた歌枕であつて、古来より知られるところからすれば相当な期待感をもつて訪れたはずだ。にもかかわらず、多くは同行する曾良による縁起譚を紹介するに留めており、淡泊というより、失望と呼ぶにふさわしい。想像する観光地、その期待感の裏返しなのである。

以上のように、古くは実方詠の頃より近世の芭蕉にいたるまで、室の八島は古典文学の世界において定着を見た歌枕である。でありつつ、その実態が早い段階

から見失われていったことから伝承化されていき、後代にはそれを境内の「八つの小島」と想像し創造する過程を経ていまに至る。こうした過程は伝承を前景化させつつ過大に評価して取り上げる、観光地の特徴と呼んでよいのではないか。室の八島はそうした問題を考えるに良き事例であると思われる。

二、観光の発明

旅の始原へと遡ればスサノヲやマトタケルのそれ以來に至ろうが、ひとまず「たび」という語は古代において、必ずしも遠隔の地に向くことを意味したわけではなく、日常生活を送る住まいから一時的に離れること、あるいはそこに仮住まいすることを意味した。万葉歌に「里離り遠からなく草枕旅とし思へばなほ恋ひにけり」（卷十一・三二三四）とある通りである。遠隔だろうと近隣だろうと普段の生活圏から外れることであつたから、非日常がもたらす不安感とともに「恋ひ」の感情を喚起するのだらう。『源氏物語』で光源氏が方違えした先で、「女遠き旅寝はもの恐ろしき心

地すべきを」(「帚木」一一九三)と、冗談めいた物言いをする事から、方違えであつても「旅」と呼ばれ、それが「恐ろしき」感情をもたらし、「女」への恋情を呼び込む図式が見て取れる。

もちろん、「旅」と呼ばれるものでも程度の差はあつたようで、万葉歌には、「旅とへど真旅になりぬ家の妹が着せし衣に垢付きにかり」(巻二十・四三八八)と見えており、旅のなかでも真旅となると着物が汚れるとあるから、遠隔と近隣、短期と長期の旅の違いは認識されていたようだ。

では、旅の目的は何かといえ、多くそれは日常の業務や職務の必要上になされるもので、観光とは異なるものだったと言つてよい。日々の生活から離れてリフレッシュしたり、風光明媚な地を目に焼き付けたいといったものではなく、現代ならば「出張」・「遠征」といった語に近いだろうか。実際、『万葉集』に見える旅の多くは官人たちのそれである。^(注8)また、時代は下つて紀行文の嚆矢とされる『土佐日記』は、土佐守の任を終えて都に戻るまでの旅日記であつた。

自身の生活圏から離れるがゆえに旅には恐れや不安

がつきまとい、結果として望郷の念をもたらす。『万葉集』の羈旅歌も、『土佐日記』の船歌もそれが十分にうかがわれる。^(注9)だから生活圏のウチとソト、すなわち境界に対する観念は多分に意識されたらしい。邸から一步踏み出す時には「戸」や「門」が意識され、「関」や「橋」などはこちらの世界とあちらの世界を区切るものとして出てくる。つまり、旅というものは異郷・異界の観念と結びついてくるわけであつて、引き起こされる恐怖感や不安感^(注10)は未知なるモノへのそれである。「辻」・「境」・「峠」といったところに道祖神(サ

エノカミ)の類が見出される理屈も同じである。『伊勢物語』における「昔男」の東下りでも、『源氏物語』における光源氏の貴種流離でも、境界を跨ぐことで異郷意識と望郷意識とが顕在化するわけである。

こうした未知なる異郷・異界への恐れが、同時に感興や好奇心といった「あこがれ」の感情を呼び込むのはなぜだろう。そこには物語等の信仰の旅のあり方と、和歌的な発想に基づく歌枕への関心が大きく作用していたのだと考えられよう。古代の旅から次第に観光の意識が生まれてくる過程がそこにある。

まずは信仰・宗教の旅では伊勢の斎王群行が注目されるが、平安時代以降に諸国の交通網が整うのに伴い、撰関期ごろからは社寺への参詣・巡礼が活発化していく。なかでも熊野参詣は目立つものとなっており、交通インフラの整備をさらに加速させることもあった。

もちろん伊勢詣も室町時代以降には盛んになっていき、近世期の宿場の発展や講組織の出現などは庶民による信仰のかたちであるとともに「観光」の普及を意味しているよう。ついには、『東海道名所記』などの「道中記」「細見記」「名所図会」といったいわゆるガイドブックや、『旅行用心集』などのマニュアル本の類が出現するものもこのころである。^(註10)

日本の旅の歴史をあらためて振り返るにあたり、平安日記文学のなかでの記述は見逃してはならないものだろう。上京するために『土佐日記』では海路が、『更級日記』では陸路がと、往時の旅程の一端が窺い知れる。「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」(一五)の書き出しを持つ『土佐日記』を初めとした平安日記文学は、「女流」と冠せられるが、この「女」の視座による点が大事である。「男」すな

わち官人による視点では、しぜん職務としての旅に傾きがちであるからだ。『更級日記』が上洛の記に、下総の国の「まののてう(長者)」(二八一)を、武蔵国では「たけしば(竹芝)」(二八三)を、相模国では「遊女」(二八七)にも目を向けており、訪れる各所の伝承などに興味・関心を向ける旅の様子が窺える。また、物語の記事としては『蜻蛉日記』以降の日記に太秦・石山・初瀬・鞍馬らが見えるが、これらは紀行文の性格をもつと見てよい。中世になると紀行文的作品の展開も見られ、『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』『春の深山路』などが知られ、これらは古歌や『伊勢物語』等に見られる歌枕への関心が顕著となってくる。^(註11)

他方、遊行・流離する者たちの動静も見逃すことはできない。宗教者なら親鸞、日蓮、一遍などの旅が思い浮かぶはずだが、ここでは平安期の増基や西行といった旅する歌僧の系譜を受けて、宗祇・宗長らの連歌師による旅が注目される。西行歌には「常よりも心細くぞ思ほゆる旅の空にて年の暮ぬる」(和歌文学大系『山家集』冬・五七二)とあり、こうした心境に至るいわば漂泊へのあこがれが彼らの旅を形作っている

といえよう。それとともにここで問題としたいのは、彼らの旅が歌枕を実際にこの目で確かめ歌作に生かそうとする目的をもつものでもあって、歌枕という名所をたどる点に観光の萌芽が認められるのではないだろうか。

本来的に歌枕とは「作歌便覧」「和歌用語便覧」とでも言うべきものであったが、次第にそれに載る歌語を指すようになり、のちには地名に特化したものを表すようになった。^(注12)それでも単に地名であればすべて歌枕となるわけではもちろんなく、そこに古今集的表现と絡み合いながら何かしらのイメージが付与してはじめて歌枕と呼ぶべきものとなる。^(注13)ただし、こうした歌枕が定着する根本的な背景としては、その地に対する国讀め的な観念が多分に作用していたのであろうし、和歌における修辭上の問題だけではあるまい。^(注14)もちろん、歌枕なるものが初めに成立して、それが歌として広まっていくのではない。現地に実際に訪れずともよい。ひとつの地名があるイメージとともに歌に詠み込まれ、またそれが本歌として後代に受け継がれていくことをもって歌枕は成立していくこととなるろう。

ある土地に日常的に在住する者と、一時的にそこを訪れる者とは、その場所の見え方がおのずと異なること、当然である。京都を訪れるインバウンドにとつてみれば、そこに「京文化」や「ニッポン」を見出したいわけで、普段からそこで生活する者にとってはユニクロやスターバックスの方がありがたい存在なわけだ。古代の都びとにとつてみれば、地方に対する理解はステレオタイプなものへと落ち着く。ひとつの土地に向けた都びとのまなざしは皮相的なものとなるわけであり、中世の紀行文などで次第にその土地が持つ特性、すなわち郷土のすがたの掘り起こしがなされていく。しかし、それが確固とした「郷土の文学」として定着を見るのは、鈴木牧之『北越雪譜』や菅江真澄の著作などまで待たなくてはなるまい、^(注15)以上のように旅や観光の問題を概観することができるろう。

三、コンテンツツーリズムと貴種流離譚

^(注16)現代の旅や観光は、とりわけ物語との親和性が強い。話題のアニメの舞台を訪れてその作品世界に没入

して楽しむ、いわゆる「聖地巡礼」はもはや市民権を得ており、それを見込んで自治体などが観光資源として町おこしに躍起になる例は枚挙に暇がない。もちろん、これまでも歴史散歩や文学散歩といった言葉はあって、それを楽しむ層は一定数いたわけである。信玄の足跡を訪れたり、漱石作品に関連する場所を見て回ることなど、いまだに多くの人々を旅に駆り立てる契機となっている。ただし、現在のそれは、リアルとフィクションの境界を自由に越境するところに特徴がある。「聖地巡礼」、「コンテツツリーズム」などの用語が生まれているが、ひとつの物語・コンテツツ（「フィクション」をより楽しむために、「聖地」というリアルに触れることによって物語に自己を没入させるのみならず、そこからSNS等を介して自分なりの物語・コンテツツを発信していく）。

しかし、現地に足を踏み入れても物語を生かし切れないと、期待感が大きい分、観光は途端に失望するものへと転落する。巷間には「三大がっかり観光地」というものが、まことしやかに喧伝されている。北海道札幌市の「時計台」、高知県高知市の「はりまや橋」

長崎県長崎市の「オランダ坂」、これらがそれに当たるとはいいが、「がっかり観光地」と名指された方はいい迷惑である。たしかに、実際に見るそれらは他と大きく異なる特徴があるわけではなく、いずれも卑小・平凡なものに過ぎない。それでも観光地に仕立てるだけの物語（由緒・来歴）があつたわけで、訪れる者がそれを消化しきれていないだけのことである。

ちなみに室の八島の所在する栃木県栃木市には、近年、「聖地巡礼」されるスポットがあつた。何のことはない、JR小山駅ホームに存在した平凡な立ち食いそば屋、屋号までありふれた「きそば」という店である（二〇二二年に閉店）。そこは、二〇〇七年に公開された新海誠監督のアニメ「秒速5センチメートル」に登場した立ち食いそば店のモデルとなったことで、熱心なファンが「聖地巡礼」のスポットとして駆けつけたのであつた。^(注18)訪れたファンたちは、なんだ普通の立ち食いそば屋だ、と失望してなどいないだろう。平凡な立ち食いそば屋であることを分かつたうえで、そこに物語を重ねて没入しているからこそ楽しめるのだ。そうした意味において、芭蕉は物語（歌枕・伝承）

を楽しんだとはいえない。実態としての室の八島にこだわるあまり、その卑俗さにひとり幻滅したに過ぎない。

歌枕の地、伝承の地、物語の地。そこに訪れる者たちに試されるのは、単に地理的・物理的な実態にのみ目を向けるのではなく、どこまでもフィクションに付き合うだけの度量だといえるだろう。そうした姿勢を示すものを、以下、平安文学を事例に取り上げてみたい。ここに平安文学を取り上げるのは、歌枕を醸成する古今集の時代であり、また物語という文学が開花した時代でもあるからだ。いくらでも指摘できようが、端的なもののみを取り上げて観光の問題を考える一助としてみたい。

また、住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人のよめる歌、

今見てぞ身をば知りぬる住江の松より先にわれは経にけり

ここに、昔へ人の母、一日片時も忘れねばよめる、住江に船さし寄せよ忘草しるしありやと摘みて行くべく
 『土佐日記』四六)

土佐国から船で上京するにあたって、摂津国住吉のあたりを漕ぎ行くところである。「住江の松」を目の前にして我が身の老いを実感するというのが前者の歌である。松そのものはどこにでも生えているものの、「我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世経ぬらむ」「住吉の岸の姫松人ならばいく世か経しと言はましものを」(『古今和歌集』巻十七・雑歌上・九〇五・九〇六)などに歌われるように、住吉の松は長寿の象徴として名高い歌枕だ。「今見てぞ身をば知りぬる」とあつて、まさに現地を目の当たりにして歌枕(＝フィクション)に重ねながら自己へと照射させるというのは、平安時代の「聖地巡礼」「コンテンツツリズム」と呼ぶにふさわしい。一方で後者の歌は亡児を偲ぶ親の立場から詠まれたものだが、「住吉と海人は告ぐとも長居すな人忘れ草生ふといふなり」(『古今和歌集』巻十七・雑歌上・九一七)、「道知らば摘みにもゆかむ住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草」(同・墨滅歌・一一一一)と見えるごとく、人や恋、あるいは悲しみを忘れるという「忘れ草」で知られる住吉を踏まえている。亡児を偲びつつも悲しみをひととき忘れようと

して、「船さし寄せよ」と強く望むのは、それだけ歌枕（＝フィクション）のもつ力に没入しているさまを見て取れる。

歌枕が実際に訪れる人々の心に働きかける例を考えたが、同じ摂津国の須磨をいまひとつの例として引いておきたい。ここは現在でも歴史散歩・文学散歩の地として著名なところである。須磨寺には芭蕉の句碑として「須磨寺やふかぬ笛きく木下闇」が、蕪村の句碑として「笛の音に波もよりくる須磨の秋」が見えており、俳句愛好家なら興味をもつことだろう。面白いのは、この須磨寺こそが源平一の谷合戦の舞台であった点で、『平家物語』『敦盛最期』における「笛」のエピソードなら誰もが知るところだ。つまり、芭蕉も蕪村も敦盛の悲劇を踏まえて句作し感じ入っている点において、彼らもまた文学散歩を実践しており、その句碑を鑑賞するわれわれもまたその地の過去に思いを馳せる、すなわち入れ籠構造をとっているわけである。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、ま

たなくあはれるものはかかる所の秋なりけり。

（『源氏物語』『須磨』二―一九八）

平安文学の事例で須磨を挙げるなら、当然、『源氏物語』を外すわけにはいかない。『源氏物語』の「須磨」巻といえ、光源氏の貴種流離譚としてよく知られるところである。現在の観光客でそれを目当てに訪れる者は多いが、光源氏も「観光」した一人と言えるのではなかったろうか。古今集歌「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」（巻四・秋歌上・一八四）が場面の下敷きとなりつつ、流離・沈淪する光源氏の心を象つていき、より具体的には須磨流離の先蹤たる在原行平のことを重ねている。行平の歌として、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ」（『古今和歌集』巻十八・雑歌下・九六二）、「旅人はたもと涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風」（和歌文学大系『続古今和歌集』巻十・羈旅歌・八六八）が見え、行平の境遇に光源氏は自身のそれを重ねているといつてよい。

もちろん、光源氏の須磨流離は「フィクション」であるから、敦盛に感じ入る芭蕉や蕪村とは異なる面も

あろう。それでも、『源氏物語』そして『平家物語』と、いずれも「物語」である点に変わりはないともいえる。ここで問題にしたかったのは、歌枕・伝承・物語といったフィクションが広く流通すれば、そこに訪れる者らが自身をそこに没入させて、さらなる「物語」を「拡散」させていくという過程を確かめたかったからである。「聖地巡礼」、「コンテンツツリーズム」のありかたは、平安散文作品のなかにも見出せるということであるが、やはり歌枕そのものとしては「室の八島」を考えるのが一番分かりやすい事例であるようだ。^(注15)

四、呼び込まれる伝承

旅や観光の諸問題を考えるために迂回してきたので、あらためて室の八島そのものに立ち戻ろう。ひとまず室の八島が歌枕としていかに定着していたかを見るために、勅撰集に収載されるものを一覧すると以下のようになる。

『金葉和歌集』（三奏本） 1

『詞花和歌集』 1

『千載和歌集』 4

『新古今和歌集』 2

『新勅撰和歌集』 1

『続後撰和歌集』 3

『続古今和歌集』 4

『続拾遺和歌集』 1

『新後撰和歌集』 2

『続千載和歌集』 1

『続後拾遺和歌集』 1

『新拾遺和歌集』 2

『金葉和歌集』から『新拾遺和歌集』にいたるまで、十二の勅撰集に二十三首と、まんべんなく認められる。おおよそ千載集あたりから室の八島詠が見られるが、これは百首歌が隆盛を迎えて、旅の歌が実地に訪れた詠歌から題詠として定着してくる時期と重なるものといえよう。^(注16) 特別多く収載される歌枕ではないものの、地方の歌枕としては比較的多く拾われているといえるのではないだろうか。「煙」や「思ひ」を詠み込む歌枕には、「須磨」「塩竈」などが挙げられようが、それらと比較しても少くない収載数といえるだろう。あわ

せて、室の八島が所在する下野国の歌枕「那須」「標茅原」などと比べても、これほど定着を見る歌枕はない。それだけ、室の八島は著名なものだと考えられようが、ここまで注目されるのはなぜだろう。実は、芭蕉以前にも中世では連歌師の宗長がこの地を訪れている。

室の八島近き程なれば、亭主中務少輔綱房伴ひ、
見にまかりたり。まことにうち見るよりさびしく
あはれに、折しも秋なり。いふばかりなくて、発
句と所望せしに、

朝霧や室の八島の夕煙

夕の煙、今朝の朝霧にやとおぼえ侍るばかりなり。
なほあはれに堪へずして、

東路の室の八島の秋の色はそれとも分かぬ夕
煙かな

人々のもあまたありしなり。

『東路のつと』四九二

『東路のつと』で宗長は、「白河の関のあらまし、霞とともに思ひつなむ」（四八六）と、能因の歌に触発されるかたちで白河の関への旅を思い立ったことを記す。歌枕に立ち寄り、時に古歌や『源氏物語』の言

葉が引かれたりと、それはいまの文学散歩に通じるものがある。永正六年七月十六日に出生することとなるが、駿河丸子より相模、武蔵、上野をめぐり下野へと向かう。足利学校やら鎌阿寺やらに立ち寄るのは現代の足利観光そのもので、佐野から壬生へと渡りさらに室の八島に訪れて、感興に堪えず発句ならびに和歌を詠む。その後、鹿沼、日光、黒髪山、宇都宮とめぐり、いよいよ念願の白河へという段で、戦乱と大雨の影響もあり、壬生、大平、佐野へと逆戻りする。こうしてみると『東路のつと』は、中世までの下野国の道行きを記したものととして貴重である。

前にも触れたが、歌僧による漂泊や流離といったもののへの憧憬は、増基や能因、そして西行らに見られるが、その伝統のもとに『東路のつと』のような紀行文学が形成されてくる。漂泊や流離への憧憬が歌枕への関心を呼び込み、さらにそこから観光の旅を醸成する過程を『東路のつと』に見ておきたい。そうした意味において、歌枕への関心、連歌師の動向は観光の問題を考えるにあたり無視できないはずだ。

ひとまず『能因歌枕』（広本、日本歌学大系第一巻）

にあたってみると、「下野国」の項には、「ふたご山」、「きぬがは」、「中つかさの宮」、「いほのぬま」、「まゆみの杜」のみを挙げ、いまだ「むろのやしま」は見えない。^(注22)ただし、顕昭『袖中抄』（第十八）には能因の「坤元儀」の説を紹介するかたちで、

むろのやしまとは下野国の野中に嶋あり。俗にはむろのや嶋とぞ云。むろは所名歟。其野中に清水の出る気の立が煙に似たる也。是は能因が坤元儀に見えたり。

（日本歌学大系別巻二）と見えている。『五代集歌枕』の「嶋」に「室の八島」は見えず、『和歌初学抄』（同巻二）に「下総むろのやしまケブリタエズタツ」と見え、「下総」が不審だが、^(注23)「煙」の語との縁が示されている。『和歌色葉』（同巻三）に「下野むろのやしまけぶりたえずたつ」と、『八雲御抄』（名所部、同別巻三）も「嶋」の項として「むろのや」を挙げ、「非嶋ども、依^レ名入^レ之」とするの注目されよう。

室の八島を考えるには、やはり『歌枕名寄』（古典文庫）が重要で、東山部五・下野国には歌枕として、三龜山（1）・三子山（3）・阿素河原（2）・伊吹山（2）・

標茅原（3）・室八嶋（20）・黒戸浜（2）・山菅橋（1）・那須（3）の名が挙がる。括弧内は例歌の数だが、室の八島が突出して多いことが分かる。以降、南北朝期の『新撰歌枕名寄』にしても、近世期の『類字名所和歌集』、『松葉名所和歌集』、『勝地通考目録』、『類字名所補翼鈔』にも室の八島の名は挙がり、同様の傾向を示す。つまり、歌書・歌学書類を見渡してみても、近世期までは室の八島が歌枕・名所として相当の位置を獲得していたことが確かめられよう。芭蕉がまずは訪れたいと考えたのも当然である。

室の八島は下野国（栃木県）都賀郡（今は下都賀郡）にある歌枕で、平安末期以降に名高くなった存在である。名称が風変わりなことも都人の興味を誘うのに充分だったが、その上この地の池からは水気が煙の如く立ちのぼっているというのである。^(注24)まねく人の知るところとなったのである。

右に掲げたのは長谷章久による辞書的解説ではあるが、「名称が風変わり」だとする点は、当たり前のようにで実はあまり指摘がない。この一風変わった名称こそが、歌枕としての関心を高め、一方でさまざまな伝

承を呼び込んでくる土壌となっているのではないか。以下、室の八島にまつわる伝承を振り返っておきたい。

近世期には林羅山『羅山詩集』、貝原益軒『東路記』、『和漢三才図会』、『二十四輩順拝図会』、といった書に室の八島への言及が見られるが、大神神社境内の池のなかに八つの小島があつて、かつては煙を発生させていたとするなど、おおよそ現在における理解と同じである。もちろん、「八島」が本来は八つの島^(注5)ではなく後代の創造であることは前述したとおりだ。ただ、煙の発生については早くから以下のような指摘がなされていた。

絶えずたく室の八島の煙にも猶立ちまざる恋
もするかな

俊云、前のうた、絶えずたくといへるはひが事とや申すべからん、此室のやしま、実に火を焼くにはあらず、野中に清水のあるより気のたつが煙のごとくみゆるなり、それを焼くといはんこといか、但、実の煙とのみ読みきたればなどかさみはざらんや、歌がらはあしくもみえず、……中略……基云、絶えず焼く室の八島の煙にもと読みた

るはいかに侍るにか、此処に火焼くとは何にみえて侍るにか、室の八島と云ふ事、二有り、一には下野にあり、二には人の家に有るなり、爰は室ぬりたるを云ふと或物にみえて侍り、是はいづれによりてよまれたるにか、いづれにても、絶えずたぐといふ事いまだみ給はず、さればにや、惟成歌にや、風ふけば室のやしまの夕煙心のうちに立ちにけるかな、と読めるも、絶えずたちけるとはみえず、浅間の岳、不二の山などぞ煙絶えぬためしにはよみふるし侍るめり、

（新編国歌大観『内大臣家歌合 元永元年十月二日』四九）

源俊頼の判によつて、室の八島の煙が火を焚くそれではなく、野中の清水より水煙が立ったものという説明がなされている。また、藤原基俊の判では別解が示され、人家の器物としての（鼎あるいは竈）が紹介されている。『袖中抄』、『色葉和難集』、『八雲御抄』といった歌学書でもこの俊頼・基俊の判を引き注釈がつけられるが、すでにこの時期から、その意味するところが錯綜している様相を呈しているわけだ。^(注6)

室の八島がいかなる歌枕であるか、情報が錯綜する背景には現地を訪れたことのない都びとによる想像が関与している。とは言え、現地に赴いた者からもたらされる情報もあつたらしく、都からの使者に向けて下野守源経兼は、「あれ見給へ、室の八嶋はこれなり。都にて人に語り給へ」(新日本古典文学大系『袋草紙』上巻、八七)と発言している。^(注27)しかし、こうした情報は断片的にならざるを得ないわけだろうし、そこに想像の余地があるのだろう。

煙の意味するところが水煙であるとする説とは別に、鼎や竈といった器物に結びついて火の煙であるとする説が出てくる根拠としては、『竹取物語』に「やしまの鼎」(五四)という語が見えることや、『文徳実録』斉衡二年十二月に「大炊寮大八嶋竈神。斉火武主此命神。内膳司庭火皇神並授「従五位下」」(新訂増補国史大系)と示されることからである。そのうえで、室―火―煙の連想が、ひいては以下のような伝承を呼び込んでくることとなる。

伝云、何ツノコロニテヤ有ケン、此ノ所ニ長者有一人ノ息女ヲ持ツ、其名ヲコノ花サクヤ姫ト云、

世ニ雙ヒナキ美人ナリ其此都ヨリ公卿一人此所エナカサレケル、此人琵琶琴ノ上手ナリケレハ、此サクヤ姫ノ師トナシビハコトヲ習セケルガ、後ニ密通シテ此姫懐胎トナル、……中略……扱サクヤ姫ハ、ホトナク男子ヲ産ミタマフ、此御子室八嶋ノ神トナリタマフト、
(『下野風土記』)^(注28)

芭蕉に同行した曾良が、「此神ハ木の花さくや姫の神と申て、富士一鉢也」と紹介した、コノハナサクヤビメとの関連で室の八島を考えるわけである。^(注29)無戸室でウケヒをするコノハナサクヤビメは神の子を火中で出産した神話であるが、これは「無戸室」の「室」からの連想が呼び込んだきたものだったろう。

他にも、現代の事例で面白いところでは、栃木市の特産物が麻であり、その麻がらを燃やしたことから、室の八島の立つ煙として伝わったのだとする伝承もあるらしい。^(注30)ともかく、こうして室の八島に関して不詳とするほかないものがありつつ、さまざまな伝承を呼び込んでくるのは、やはり「室」の「八島」という奇異な地名のもつイメージが多分に作用していると考えてよいのではないだろうか。不思議で想像力をかき立

てる室の八島という名前が呼び込む世界を、さらに辿ってみてみることにしよう。

五、聖なる異界

辞書類であらためて「室（むろ）」という語を引いてみると、外部との間を遮断するように塗り固められた空間、閉鎖的で仕切られた場、おおよそそのような意味が出てくる。外部との繋がりがないことによって、その内部にあるものは謎めいたものとなるし、特別視されるものとなる。「室（むろ）」は「ウロ」・「フロ」・「モロ」に通じる語であるらしく、^(注31) いずれも聖なる場を意味するものといつて良いであろう。

たしかに、「むろ」を有する地名・歌枕には、万葉歌に見える「御室（諸）山」をはじめとして、「室津」や霊地「室戸」「室生寺」などは周囲から隔たった場のイメージをもつ。ほかにも、「むろ」には「牟婁」があるが、後白河院の熊野御幸の際の歌として、「有漏よりも無漏に入りぬる道なればこれぞ仏のみもとなるべき」（『風雅和歌集全注釈』二一〇八）とあるよう

に、「無漏＝牟婁」は煩惱の解脱へと至ること、熊野を意味するから、周囲から隔たった籠もりの場であることが、聖なる空間の像を結ぶこととなるわけである。先に挙げたコノハナサクヤビメがウケヒをして神の子を火中で誕生させるのも、「無戸室」という場であったことも思い出したい。

そのようなイメージが室の八島に強化される背景として、ここが流刑の地として選ばれていることは大きい。地理的にも白河の関の手前にあたり、東国の末端となる下野国であるからだろう。^(注32)

前中納言師仲卿、下野国より帰京して後、配所にて詠みたりける歌どもとて、見せに遣はしたりしを返すとて、そへて遣はしける
いかばかり露しげ、れば東路の言の葉さへに袖の
ぬるらん

返し

思ひやれ室の八島にしほたれて煙になれし袖の気色を

（和歌文学大系『長秋詠藻』下・三九九・四〇〇）
さる程に、中将、下野の国府に着きて、我が住む

べかんなる室の八島とて見たまへば、煙心細く立ち上り、折からの感懷留めがたくて、泣く泣くかうぞ思ひ続けける。

我がためにありけるものを下野や室の八島に絶えぬ思ひは

この所をば、夢にも見んとは思はざりしかども、今は栖と跡を占め、慣らはぬ鄙の草の庵、何に譬へん方もなし。〔『平治物語』中・四八九〕

一つ目に掲げた例は源師仲の例であり、平治の乱に際して藤原信頼と結んで平清盛に反逆した咎をもって流刑に処されたわけであるが、その地が下野国であった。「いかばかり」と俊成が詠み、師仲が「思ひやれ」と返歌している。室の八島での師仲の苦しみの日々は「しはたれ」や「袖の気色」などと表現され、一方で「東路」「思ひやれ」とする表現は都から遠く隔たった地としての室の八島が表されているよう。また、二つ目に掲げた例は、「中将」が藤原成憲（のちに成範）にあたるが、彼もまた平治の乱によって下野国に流されている。「下野の国府に着きて」とあり、そこに「室の八島」が出てくることから、やはりこの地が国府

近き大神神社に比定される根拠ともなる。「煙心細く」や「絶えぬ思ひ」が縁を結ぶとともにその苦衷を語り、「慣らはぬ鄙の草の庵」によって室の八島が幽閉の地となっていることを語っている。

また、だからこそ遠隔・幽閉の地たる室の八島は、貴人の零落の地としても物語られていくこととなる。次に掲げるのは有間皇子の例だが、皇子は謀反を企てた罪により処刑させられるが、「昔有馬の王子零ふれ給て下野国まで下り給」と、彼が下野国へと零落した伝説を『慈元抄』は紹介する。

其比長者独の娘を持たり。かねては常陸の国司に参すべきよし約束有ければ。彼王子忍逢給ひて。無_レ程懷妊有ければ。国司より催促ありけれど。娘は早死したりしとて。喪葬の儀式をなして野辺に送る。棺には。つなしと云魚を入れて。焼て烟を立て。彼魚は焼匂ひ人を焼に似たればなり。其心を読む。

東路の室のやしまに立煙たか子のしろにつなし焼らん

このかはりに焼とよめり。それよりしてこのしろ

と云となむ。是歌故に王子幸に逢給ふ。

〔群書類従『慈元抄』二七九〕

皇子は下野国の「長者」の娘と結ばれることとなるが、その娘は国司の許嫁であつたことから、娘が亡くなつたと偽るために画策するという話である。人を火葬する際の匂いに似るといので「つなし」という魚を焼いたということのだが、これは『おくのほそ道』に見えた話に重なるものとなっている。

それにしても、『慈元抄』は皇子が零落した地として「室のやしま」をあてているが、これはいかなる理由からだろう。^(注33)『万葉集』には処刑に先んじて皇子が詠んだ歌として、「家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」(巻二・一四二)を載せているが、これは皇子が紀伊国牟婁の湯へ護送される際に詠まれたものである。また、『日本書紀』斉明天皇三年九月の記事によれば、皇子は政争に巻き込まれることを嫌つて、療養と偽つて牟婁の湯に赴いてもいた。こうした紀伊国牟婁に関わる出来事が、室の八島に零落したという伝説を生み出してくるのではなかつたらうか。「むろ」が聖所のイメージであるがゆえに、外

部と遮断された配流あるいは零落の地となり、また悲劇の貴種、その流離の地として選び取られても来るという次第である。

歌枕室の八島を考える際の重要な歌として、「いかでかは思ひありとは知らすべきむろの八島のけぶりならでは」を論の始発に据えてみたが、実は詠者の藤原実方もまた流離させられた一人であつたことをあらためて振り返つておく必要があるう。

一条院の御時、実方、行成と殿上において口論する間、実方、行成の冠を取りて、小庭に投げ棄てて退散す、と云々。行成繆^{あひそ}ふ氣無くして、静かに主殿司を喚びて、冠を取り寄せて、砂を擺^はひて之れを着して云はく、「左道にいまする公達かな」と云々。主上小部より御覧じて、「行成は召し仕ひつべき者なりけり」とて、藏人頭に補せらる。実方をば「歌枕みてまゐれ」とて、陸奥守に任せらる、と云々。任国において逝去す、と云々。

〔新日本古典文学大系『古事談』二二三二、一六〇〕
殿上で行成と口論となつた実方が乱暴を働き、それをご覧になつていた一条帝が行成を取り立てる一方

で、実方には「歌枕みてまゐれ」と命じて陸奥守に任じている。結果、任国において亡くなったことを考えると、論の冒頭に据えた「いかでかは」詠についてもまた違った捉え方ができようか。もちろん、室の八島はおおよそ下野の歌枕として認識されてきたわけであつて陸奥ではない。^(注34) また、詠歌事情からは室の八島詠を恋歌としてとつて良いが、それでも、外部と隔絶された流刑・流離の地でもあつた室の八島を考えると、歌中の「思ひ」に「歌枕みてまゐれ」とされた苦しみを読むことは許されるのではないか。

かへるさはけぶりや、どのしるべなるむろのやし
まのあまのつりぶね

(『為忠家初度百首全釈』雑・釣舟・七一九)
いかにせむ室の八島に宿もがな恋のけぶりを空に
まがへん

(新日本古典文学大系『千載和歌集』巻十一・恋歌一・七〇三・藤原俊成)

室の八島は下野国府近くの内陸に比定され、決して舟で移動するようなどころではない。それでも、俊成が詠じた前者の歌のごとく、「むろのやしま」に「あ

まのつりぶね」が結びついていくのも、流離・漂泊のイメージがそこに介在していたからではなかったか。^(注35) また、恋歌であつても後者の俊成歌が「宿もがな」とするのも、漂泊を前提とするからこそ「宿」＝籠もりの場たる「室」が要請されるのではないだろうか。^(注36)

流離・漂泊のイメージを負い、聖なる地である室の八島。いわば異界であるがゆえに、この地は聖人・偉人・異能者の類とも接点をもつようになる。『補陀洛山建立修行日記』によれば、日光を開山したとする勝道上人の先祖卷向尊は、「遂住下野国室八島」(統群書類従)とあり、室の八島に住んだとされる。また、『続日本紀』(宝龜三年)には道鏡が下野国薬師寺別当に任ぜられたことを記し、室の八島に滞在したという伝承を境内の碑文は紹介する。さらに、『下野国誌』に見える「親鸞聖人行録」には、

下野国に御経廻ありて、室のやしまという所に、
暫く御住居ましますとなり。御旧跡の所は、室明
神の東にあたりて、思川という渡りあり、

とあつて、親鸞聖人までもが室の八島に逗留したとする伝承が付随してくることとなる。いずれも伝承の類

を出ないものなのだろうが、それでもいままで確認した「室（むろ）」に対する観念があるからこそ、これら伝承が生み出されてくるのだろう。

歌枕である室の八島は物語文学の表現にも認めることができるのだった。『狭衣物語』の主人公たる狭衣は、妹のように育てられた従妹源氏の君に対して恋心を抱く。その内面を語る歌枕として、物語冒頭部を初めとして都合六回も引用されて、いわばキーワード的に機能している。「いかでかは……」の実方歌を透かしつつ、言うに言えぬ「思ひ」を象る表現は、許されざる源氏の君への心の苦しみの炎となっていよう。^(注5)『苔の衣』や『石清水物語』、あるいは『いはでしのぶ』などの鎌倉時代物語に引かれる「室の八島」も同断で、思いを伝えきれぬ鬱屈とした恋心を語るものとなっている。^(注6)歌や物語、そして伝承それぞれによりイメージが増幅され引き継がれていく歌枕こそ、「観光」に値する場を生み出していく源となるのである。

室の八島、いまは忘れられた観光地、そのように呼んでもよいかもしれない。しかし、少なくとも近世までは重層的なイメージを内包する著名な歌枕であ

り、観光地であったといつてよいだろう。煙立つ室の八島は、言葉に出せない「思ひ」とともに歌に詠まれていき、はやくから確固たる内実を掴みきれないことが、逆に歌枕としての関心を高めていく。「室」であり、「八島」であるという、この謎めいた名が、和歌も物語も伝承も、さまざまに吸収していく磁場となつて、聖なる異界としての場となり得ていった。

もちろん、都から遠く隔たったことも歌枕としての関心を高め、都びとにとっては憧憬の地となっていく。それとともに、旅する歌僧、連歌師らがそれを訪れていくことをもつて、名所・観光地としての相貌も次第に宿していくことになるのであった。室の八島は歌枕として、旅の古代、そして観光の中世を考えるに実にふさわしい例なのである。

[注]

(1) 西村亨『旅と旅びと』（実業之日本社、一九七七
年）参照。

(2) 本論文における和歌や散文作品の引用等は、その都度出典・巻数・頁数・歌番号等を明記したが、

出典明記していないものについては小学館新編日本古典文学全集本に拠る。

- (3) 新日本古典文学大系『平安私家集』内の「実方集」、ならびに和歌文学大系『中古歌仙集(二)』内の「実方中将集」の脚注。二首の詠歌事情については、『小大君集』が以下のように載せている。

さねかたの中将人のがりやらんとて、為たうの君に「かくいはんはいかが」といひける歌いかでかは思ひありとはしらすべき室の八嶋の煙ならでは

「をかし」などいひて為任の君わがけさうする人のがりやりてけり。女も聞きてわらふほどにわたりければ、女

このころはむろの八嶋もぬすまれて

といひければ

えこそはいはねおもひながらに

(『小大君集全釈』七九・八〇)

- (4) 『散木奇歌集』には以下の歌が見えており、詠者源俊頼が別宅をもったことから大津市田上に室の八島が所在したとする見方もある。

田上にて船にのりてやしまといふ所に霧のいぶせかりけるをみてよめる

川ぎりの煙と見えてたつなへになみわけかへるむろの八島に

- (新編国歌大観『散木奇歌集』第三・秋・四六九)
(5) 加藤定彦『奥の細道』に探る東国の歴史―「室の八島」を中心に―(「アジア遊学」二〇一一年七月) 参照。

- (6) 長谷章久『古典文学の風土(「諸国編」)(学燈社、一九六三年)、尾形仿『おくのほそ道評釈』(角川書店、二〇〇一年) など。なお、塚越義幸「下野の『おくのほそ道』―「室の八島」の章をめぐる―」(『栃木文化への誘い』下野新聞社、二〇一三年) は、歌枕として知られた室の八島が芭蕉にとって予想外であったことから、それが「不易流行」を初めて体験する場であったと見る。

- (7) 栃木県の観光地として思い浮かぶところはどこであろうか。東照宮や中禅寺湖のある日光がやはり圧倒的で、次いで、鬼怒川や那須といったところだろう。現代において室の八島の知名度は低い。

ちなみに、明治二二年刊行のガイドブック『内国旅行 日本名所図絵』巻之四（嵩山堂、ゆまに書房、二〇一三年）における「下野国之都」では、「神橋之景」「東照宮之景」など日光に関わる説明が圧倒的で、現在の栃木市については「栃木渦川（巴波川）之景」の図示があるものの扱いが小さく、室の八島についても細字で、「茲に小島の如き八箇あり方今池水絶たれど、むかし此池より水蒸気、煙の如く立昇なり故に古人歌枕とす」と注記・補足が施されるのみである。また、明治二七年刊行の『全国鉄道賃金名所旧跡案内』（ゆまに書房、二〇一四年）には、「両毛鉄道」の「栃木停車場」の項目に、「室八島は栃木町より東二里惣社村の内に在り此地は昔時見真大師の暫く幽居せし処なりと」の記載をわずかに見つけることができる。以降、明治二八年刊行『全国鉄道名所案内』（巖々堂）、大正七年刊行『鉄道旅行案内』（鉄道院）になると、栃木市は「栃木町」「太平山」「錦着山公園」などが紹介されるが、室の八島は見えなくなる。さらに昭和期になると、『日本案内記

関東篇』（鉄道省、一九三〇年）に栃木駅の案内として、「栃木町」「太平山神社」などが載るが、「室の八島」は見えず、改版後も掲載されていない。鉄道網が整備される近代になって、近世期までの歌枕（イメージ）が影響力をもった時代から、実景や存在感そのものをもつ魅力へとシフトしたことで、見失われた観光地になったといえようか。なお、近代の旅行ガイドについては、荒山正彦『近代日本の旅行案内書図録』（創元社、二〇一八年）が詳しい。

（８）大浦誠士「旅」（『万葉語誌』筑摩書房、二〇一四年）。『万葉集』の旅については、野田浩子「旅」（『ことばの古代生活誌』河出書房新社、一九八九年）も参照。

（９）津島昭宏「『土佐日記』の折り―船歌と童の問題をめぐって―」（『横浜英和学院教育』二〇一二年三月）は、『土佐日記』に見える船歌は望郷の念が込められたものだとしつつ、それ故に無事に航行できるよう海神に祈る手向けの歌でもあるとする。

- (10) 北川宗忠「観光史」『新・観光学概論』（ミネルヴァ書房、一九九四年）、大久保あかね「観光史 日本（１）飛鳥時代―昭和時代戦前」『観光学の基礎』原書房、二〇〇九年）、溝尾良隆『日本と世界の観光史―観光はどう発展してきたか』古今書院、二〇二五年）参照。
- (11) 紀行文学的要素を含んだ古典文学において、その旅程を概観・検索するには、福田秀一・プルチョウヘルベルト『日本紀行文学便覧―紀行文学から見た日本人の旅の足跡―』（武蔵野書院、一九七五年）が至便である。
- (12) 中島光風「歌枕」原義考証（『上世歌学の研究』筑摩書房、一九四五年）。
- (13) 片桐洋一「歌枕の成立」（『古今和歌集の研究』明治書院、一九九一年）。
- (14) 鈴木日出男「歌枕の本性」（『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇年）。
- (15) 長谷川政春「郷土の文学―在地者の眼と漂泊者の足―「北越雪譜」と「真澄遊覧記」」（日本文学講座7『日記・随筆・記録』大修館書店、一九八九年）。
- (16) 「観光」や「ツーリズム」の用語については、溝尾良隆「ツーリズムと観光の定義」（『観光学の基礎』原書房、二〇〇九年）に詳しい。
- (17) ここに関わる問題については、岡本健「コンテンツツーリズム」（『観光の事典』朝倉書店、二〇一九年）に整理されている。
- (18) 「朝日新聞」朝刊（栃木全県・二〇二三年一月一日、二〇二五年五月一日）。
- (19) もちろん、芭蕉が「室の八島」に「失望」したごとく、歌枕に期待したがゆえに裏切られる例が平安文学でも存在し得ただろう。『伊勢物語』第九段「東下り」では「三河の国八橋」の地名起源として、「水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける」（二二〇）と紹介するが、『更級日記』では、「八橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見どころもなし」（二九二）と、率直に落胆するさまが記されている。
- (20) 田中新一「歌人・連歌師の「道の記」 海道記から宗長手記まで」（日本文学講座7『日記・随筆・

記録』大修館書店、一九八九年）。

- (21) 現代の観光地への憧憬が多く画像や動画でもたらされるように、やはりその地が有する視覚的な魅力は欠かせない。歌枕が流通する当時であれば屏風や障子に描かれた名所絵がそれにあたろう。増田繁夫「名所」(『和歌文学大辞典』古典ライブラリー、二〇一四年)は、名所絵屏風・障子に当地を詠んだ歌が添えられて、抽象化されたイメージとしての風景こそが「名所」であって、そこに「歌枕」が実景から離れて成立する経緯があるのだと説明する。また、笹川博司「歌枕と名所意識」(『王朝文学と交通』竹林社、二〇〇九年)は、歌枕への憧憬＝名所意識が生まれる背景に、①日常を「煩わしい」と思う認識、②名所絵の影響、③都鄙を往還する受領らがもたらす情報、の三点を挙げており首肯される。

- (22) 「しもつけの国」の項には、「かねの井」、「からすがは」、「かとりのみね」、「したきの松山」、「いぶきの松山」と見えるが、これは「下総国」のことと思われ、「下野」と「下総」は混同されるら

しい。

- (23) 注(22) 参照。

- (24) 注(6) 長谷章久『古典文学の風土(諸国編)』学燈社、一九六三年)。

- (25) 注(5) 参照。なお、細矢藤策「室の八島の煙考」(『野州国文学』一九六九年三月)は、「集合祭祀の場となっていた「微高地」なるが故に、神聖なる島——八島」であるとし、「水神としての大神神社がまつられたところとあれば、水気の立つのを詠んだとするのも当然」だと述べる。

- (26) 久保田淳『新古今和歌集全注釈』(角川学芸出版、二〇一一年)は、藤原清輔の「朝霞深く見ゆるや煙立つ室の八島のわたりなるらん」(巻一・春歌上・三四)を注するなかで、「室の八島」を「いわゆる難義に属する歌語である」としている。

- (27) なお、ここの使者は「国府」に訪れたことが文中に示されるため、室の八島が「国府」に近い現在の大神神社に比定する根拠たり得る。

- (28) 『下野風土記』(栃木県郷土文化研究会、一九五八年)。

(29) 細矢藤策「室の八島と産育文学」(『野州国文学』一九七〇年一二月)は、室の八島について浅間信仰・産育信仰から考察する。

(30) 影山有子「ふるさとの民話―室の八島―」(『国文鶴見』一九七〇年三月)参照。こうした俗説は数多く生まれたのだろうが、『下野国誌』(下野新聞社、一九八九年)には「附会の説にも論にもたらず」と退けるものの、「那須郡」に見える「室」の字を含む八つの地名からとする説、「都賀郡」に見える「島」の字を含む八つの地名からとする説を挙げている。

(31) 古くは本居宣長『古事記伝』が、「御諸」について「御室なり。凡て神社を言。又三輪山を言るも常なれば、然にてもあるべし」(本居宣長全集)とし、また、柳田国男は「ムロ」と「フロ」の関連を説く(『定本柳田国男集』「石神問答」・「風呂の起原」)。なお、石上堅は「ムロ」を、「霊的な神秘の隠りの場所」であると整理している(『日本民俗語大辞典』桜楓社、一九八三年)。

(32) 室の八島は下野国の歌枕として知られるものの、

陸奥の地としての認識もあったようで、以下のような例がわずかながら見える。「播磨の室」とも混同されがちだとする指摘も面白いが、ここでは「おくの室」と認識されている。なお、「下総」との混同は注(22)で示した。

よそふへき室の八嶋も遠ければ思ひのけふりいか、まかはん
晴やらぬみのうき雲をいとふまにわかよの月の影そふけぬる

よそふへきとはたとふへきと云にひとしきなり。いかゝとは何となり。室の八島播磨の室にてはなし。おくの室也。八島といふ所に恋をして死する女あり。塚に築籠てあれは。朝夕けふりたちける時。ちかくは思ひの烟をたとふへけれ共とをきとなり。

(33) 〔統群書類従『後鳥羽院御百首』七二二〕細矢藤策「室の八島と唱導文学―成憲流離物語を中心に―」(『野州国文学』一九七〇年三月)は、成憲らの流離譚をふまえ唱導文学の観点から室の八島を位置づけている。

(34) 注(32) 参照。

(35) 『為忠家初度百首全釈』が注するように、注(4)の歌を参考にしたとする考えも成り立つ。

(36) 木村尚志「藤原俊成の『室の八島』詠の再解釈」(『中世和歌の始まり 京と鎌倉をつなぐ文化交流の軌跡』花鳥社、二〇二一年)は、院政期における室の八島の歌枕化は実方左遷説話の形成に伴って進んだと説く。

(37) 後藤康文「『室の八島』の背景」(『狭衣物語論考 本文・和歌・物語史』笠間書院、二〇二一年)は、実方の義妹恋慕、あるいは「しのぶもぢずり」の歌で知られる『伊勢物語』初段における業平の「妹」への思慕が認められる点において、異母妹源氏の君に恋する狭衣の心中を語る表現として、「しのぶもぢずり」とあわせて室の八島の歌が選取られるのだと説く。

(38) 伊東祐子「『藤の衣物語』と鎌倉時代物語をめぐって―『室の八島』と『出家遁世流譚』を中心に―」(『平安文学研究 生成』笠間書院、二〇〇五年)参照。